

# 特別支援教育教員養成課程で知る 子どもの障害

後編

本コーナーでは前号に引き続き「子どもの障害」を考えます。後編となる今回は、障害とどのように関わっていくべきか、そのヒントを宮城教育大学で教えていただきました。宮城教育大学では学生たちが積極的なボランティア活動を展開しています。その取り組みとあわせてご紹介いたします。



中井 滋 先生  
宮城教育大学 特別支援教育講座 教授

専門は特別支援教育。肢体不自由教育、病弱教育、自立活動を中心に研究。宮城教育大学附属養護学校長、文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部特別支援教育専門部会委員、日本療育学会理事などを務め、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会から委嘱された委員会の委員長としても活動。また独立行政法人教員研修センター等における研修会では講師も務めている。

自分で望んで障害を持つ人はいない。  
自分も障害を持つ身になるかもしれない。

中井先生／拒否しない、友だちだと認める姿勢でしょうね。「あの子がいるからクラスの勉強が遅れる」と排除するお母さんがいないとも限りません。そうではなく、「あの子もお友だちなんだ」とお子さんにお話することが必要になりますね。

子どもが障害のある子どものことを話したら「そうだったの」と聞いてあげる。もし障害のある子がお子さんを叩いてきたりしたら、「けしからん！担任の先生に言わなきゃ！」ではなく「その子はあなたのことが好きだからなのよ。たたかないでねって言ってごらん。」とまず肯定してみたいかがでしょうか。親御さんが障害を持つ方のことをどう考えるか。彼らと一緒に社会をつくっていくんだとお考えになればお子さんにだってちゃんと伝わります。

M／おっしゃる通りですね。  
中井先生／私はよく学生たちに話しますが、自分で望んで障害を持った方なんていらっしゃるよ。私たちがいつ障害を持つ身になるか分かりません。みんなで助け合うべきではないでしょうか。みなさんがそうお考えになれば、いろいろなことがスムーズに解決していくんじゃないかと思えます。

どうして偏見や差別は生まれると思いますか？偏見や差別をする人が悪いと思いますか？

M／……はい、そう思いますが。  
中井先生／僕も昔はそう思っていました。でもね、ある経験から自分にも偏見や差別の芽があるのかもしれないと考えるようになりました。では、どうして偏見や差別が生まれるのか。それは「知らない」か

ら。それで驚いたり恐怖を持ったりするんじゃないかって。障害を持つ方に接したことがないから、正しく理解することができないのではないかと考えたんですね。

保護者の方が障害者の方を知るには、また知る機会を設けるにはどうしたらいいかなと、今回の取材を通して感じていますね。

とは言え、やはり優しいまなざしや支援の気持ちは大事にしたいですね。

M／そうですね。分かりました。

中井先生／それと子どもは素直ですから、お母さんに「あの人はどうしてあれ（車椅子）に乗っているの？」と聞くと思うんです。そうしたら「病気なんだよ」の一言で充分ではないかな。子どもは小さい頃から「病気」という言葉がととも身近です。だから「病気」の一言で理解できると思えますよ。

## 「解ろう」とする共感的態度

M／宮教の学生さんたちは、障害を持つ子どもたちと取り組むボランティア活動に積極的だとお聞きしました。

中井先生／ええ、そうですね。障害のある子どもたちと遊ぶ「カンガ

ルークラブ」や病氣療養中で入院している子どもたちと遊んだり、勉強を教えたりするサークル「ありんこ」、手話サークル「ハンズ」などがあります。その他にも障害のある子どもたちと研究室単位で関わっている教員もおりますね。教員が個人的に相談を受けるケースもけっこうあるんですよ。

M／それでは最後に、私たち大人がもっと障害を理解するためにはどう接していけばいいですか？

中井先生／本当は講座などに参加できればいいのですが、なかなかそういう機会がないでしょうからね。

障害をお持ちの方、そしてその保護者の方は本当にいろいろな悩みを抱えています。私たちに同じ病氣や障害があれば共感することができますが、そうではない。

ですが、「解ろう」とする気持ちはある。僕はそれを「共感的態度」と呼んでいますが、話を聞こうとすること。これが大切だと思います。

私たちが話を聞くことで、障害者の方がとても安心したり、もしかすると生きる希望を持つことにつながるかもしれませんよ。

M／本当にそうですね。とても勉強になりました。ありがとうございました。



## 優しいまなざしと支える気持ち

ままばれ編集部：(以下・M)／子どもたちが障害を理解するために、親はどんな教育をすればいいのでしょうか？

中井先生／保護者の方が障害のある大人や子どもたちに対して“どのように接しておられるか”、それがそのまま教育になるのだと思います。

例えば街で車椅子に乗る方に出会えば、子どもが珍しがってそばに行くと触るかもしれない。その時「ダメよ！」「こっちに来なさい！」と強く叱責したら、子どもは「近寄ってはだめなんだ」となります。「ごめんなさいね、初めて見るので触ってしまっただけ」と言えば印象が大きく違ってきますよね。保護者の方が障害を持つ方をどう感じているか、それは言葉や態度に出ます。

ですから、保護者の方が、障害のある方に『優しいまなざし』を向けること。そして「何か自分にお手伝いできることがあるかな？」と『支援をする』という態度で接することが大切です。そうすれば障害を持つ方を理解できる子どもに育つと思います。

M／それでは、お子さんと同じクラスに障害を持つ子どもがいる場合の保護者の態度はいかがでしょう？



今回の震災でも、宮教の学生さんたちは被災地で特別支援のボランティアを行いました。

